

SHOW HEY シネマルーム


Data

監督：カルロス・サウラ
出演：ロレンツォ・バルドゥッチ /
リノ・グワンチャーレ / エミ
リア・ヴェルジネッリ / トビ
アス・モレッティ / エンニ
オ・ファンタスティキーニ /
ケテワン・ケモクリーゼ / フ
ランチェスカ・イナウディ

ドン・ジョヴァンニ 天才劇作家とモーツァルトの出会い

2009年・イタリア、スペイン映画
配給 / ロングライド
127分

2010 (平成 22) 年 4 月 25 日鑑賞

テアトル梅田

みどころ

オペラ『ドン・ジョヴァンニ』の誕生には天才劇作家ダ・ポンテの存在が！
『アマデウス』（84年）ではサリエリを、本作ではダ・ポンテを知ったが、
モーツァルトとダ・ポンテは似た者同士？どっちもどっち？

また、放蕩生活を送る主人公ドン・ジョヴァンニは想像上の産物？それとも
ダ・ポンテそのもの？これは現実？それともオペラ？そんな渾然一体となった
劇中劇の傑作が、『恋におちたシェイクスピア』（98年）に続いて誕生！こり
ゃ必見だが、男の生き方だけは主人公を真似しないよう・・・。

あの映画ではサリエリを！この映画ではダ・ポンテを！

天才音楽家モーツァルトの名前は誰でも知っているが、その正式名がヴォルフガング・
アマデウス・モーツァルトだとはっきり知ったのは、不朽の名作『アマデウス』（84年）
を観たとき？また、モーツァルトと同じ時代を生きたウィーンの音楽家にアントニオ・サ
リエリという人物がいたことや、サリエリがモーツァルトの才能を妬みあれこれと意地悪
をしたことは、『アマデウス』を観てはじめて知った人が多いのでは？かくいう私もそうだ
った。

『アマデウス』では、1791年にモーツァルトが35歳の若さで死亡するについて、
仮面をつけマントを着た「死に神」が再三登場するのが印象的だったが、この「死に神」
はサリエリその人？だって、モーツァルトの死亡については、サリエリによる毒殺説まで
まことしやかにささやかれていたのだから。『アマデウス』ではサリエリの名前を知ること
ができたが、この映画『ドン・ジョヴァンニ 天才劇作家とモーツァルトの出会い』では

天才劇作家ダ・ポンテの名前を知ることができる。

ダ・ポンテはどんな奴？映画史上はじめて焦点が

誰でも『フィガロの結婚』や『ドン・ジョヴァンニ』というオペラのタイトルは知っているが、その台本を書いたのがイタリア生まれの劇作家ダ・ポンテであること、また『フィガロの結婚』『ドン・ジョヴァンニ』『コシ・ファン・トゥッテ』はいずれもモーツァルトがダ・ポンテと組んだオペラで、「ダ・ポンテ三部作」と呼ばれていることは、よほどのモーツァルトファンでなければ知らないはず。

『フィガロの結婚』もかなりスケベなオペラだが、『ドン・ジョヴァンニ』は「千人斬り」を楽しむドン・ファン＝女たらしを主人公にしたオペラだから、もっとスケベな物語。去る4月9日に亡くなった劇作家井上ひさし氏は真面目タイプだから、きっとこんなスケベなオペラの台本は書けなかったはず。すると、そんな台本を書いたダ・ポンテとはどんなヤツ？映画史上はじめて、そんな天才劇作家のダ・ポンテ（ロレンツォ・バルドゥッチ）に焦点が・・・。

導入部は少し難しいが・・・

宗教心の薄い日本人は、ヨーロッパの宗教革命はもちろん、ユダヤ教とキリスト教の違いなどの理解は難しい。エマヌエーレ少年が首にかけている六芒星（ヘキサグラム）のペンダントは何の意味？ジャコモ・カサノヴァ（トビアス・モレッティ）がエマヌエーレ少年が改宗される姿を苦々しく見つめているのは、みずからもユダヤ人であるため？いったんは改宗の決心がつかず逃げ出したエマヌエーレ少年が、司祭に説得されて結局改宗し、ロレンツォ・ダ・ポンテと改名したのは一体なぜ？

本作の導入部に登場する、エマヌエーレ少年を含めたユダヤ人の少年たちが次々とキリスト教に改宗させられていくこんなシーンを見ても、その意味は容易に理解できないはずだ。小舟に乗ってヴェネツィアの運河を進むカサノヴァとダ・ポンテ、するとその前に突然現れる巨大な石像を積んだ船。ヴィヴァルディの『四季』が軽快に流れる中、本作の冒頭はそんな印象的なシーンから始まるが、それに続く、導入部は少し難解。しかしこの思わせぶりな美しい冒頭シーンは、これから始まるハラハラドキドキの展開への期待を高めるには十分だ。

ジャコモ・カサノヴァにも注目！

ここで注目すべきは、カサノヴァという人物。イタリアのヴェネツィアに生まれたカサノヴァも、私はダ・ポンテと同じように本作ではじめて知った人物だ。カサノヴァは1725年生まれだから、1749年生まれのだ・ポンテより二回りも先輩だが、カサノヴァもダ・ポンテと同じように、いやそれ以上の放蕩者だったらしい。しかし、公私共に華麗

な経験を積んできたからこそ、ヴェネツィアで聖職者になりながら自由思想にかぶれ、賭博や女で放蕩三昧の生活を続け、15年間のヴェネツィア追放の刑を言い渡されたダ・ポンテに対して、さまざまなアドバイスをすることができたのでは。

カサノヴァの功績の第1は、ダ・ポンテをヴェネツィアより自由で先取の精神に富んだ音楽の都、ウィーンに行かせたこと。第2に、ウィーンで宮廷楽長をしているアントニオ・サリエリ（エンニオ・ファンタスティキーニ）を紹介したこと。そして第3は、自分自身の「千人斬り」の体験を踏まえて、オペラ『ドン・ジョヴァンニ』のアイデアをダ・ポンテに提供したことだ。モーツァルトは35歳で早死にしたが、千人の女性と関係をつんだといわれるカサノヴァは1798年に73歳で死亡したとのこと。『ドン・ジョヴァンニ』の初演に向けてウィーンにやってきたカサノヴァは、ダ・ポンテやモーツァルトに対していかなる影響を？

似た者同士？ どちらもどっち？ でも、天才同士！

『ドン・ジョヴァンニ』の初演はフランス革命直前の1787年だが、この時モーツァルトは31歳、ダ・ポンテは38歳だから、とにかく2人とも若い。とはいえ、35歳で亡くなる直前のモーツァルトは病に苦しんでいたから、その前兆は本作でもみることができる。

愛妻コンスタンツェ（フランチェスカ・イナウディ）と一緒に暮らすモーツァルトの暮らしが楽ではなかったこと、『ドン・ジョヴァンニ』の作曲によって、前金をもらえることにコンスタンツェがいたく喜んでいたりしたことなどは『アマデウス』が描くモーツァルトと同じ。ところがそれ以外でも、本作が描くモーツァルトは『アマデウス』が描いたモーツァルトと同じようにエキセントリックで少しヘン。そう考えると、やっぱり天才と狂人は紙一重ということ？

本作の主演はモーツァルトではなくダ・ポンテだが、ダ・ポンテも八方美人ぶりがあまりにも目立つどこかの国の総理大臣と同じように、あっちの女、こっちの女にいい顔をしているから、始末が悪い。『ドン・ジョヴァンニ』の着手に先立つ『フィガロの結婚』の大成功によってコンビの名を高らしめた2人だが、その仕事ぶりや私生活ぶりは2人ともハチャメチャだから、2人は似た者同士？ どちらもどっち？ でも大切なことは、2人とも天才同士！

ダ・ポンテのマドンナは？ 運命の出会いとは？

計49作も続いた『寅さん』シリーズでも「マドンナ」が大切だったが、それと同じように放蕩者を主人公としたオペラでも、どこかに純愛の面が不可欠。しかして、ダ・ポンテの「マドンナ」は絶世の美女アンネッタ（エミリア・ヴェルジネッリ）

ここでダ・ポンテがなぜアンネッタに惹かれたのかを理解するためには、日本人にはな

じみの薄いダンテの『神曲』に登場する少女ベアトリーチェを知る必要がある。地獄篇・煉獄篇・天国篇の三部から構成されるダンテの『神曲』では、ベアトリーチェは愛を象徴する存在として神聖化されている。ベアトリーチェがダンテを迎えるのは、煉獄山の頂上だが、少年の時に書物の中でそんなベアトリーチェを觀たダ・ポンテは、それ以来ベアトリーチェに一目惚れ。そんな体験を持つダ・ポンテが放蕩生活を続けていたヴェネツィア時代に借金を申し込まれたある男から、自分の娘を世話してくれと紹介されたのが、ベアトリーチェと瓜二つのアンネッタだったから、まさにこれは運命の出会いだ。

もっとも、それだけで話が終われば単なる初恋の思い出だが、父親の死後アンネッタがウィーンにやって来てモーツァルトの弟子になっていることを知ると、ダ・ポンテはアンネッタに急接近。他方、それによって、ダ・ポンテと一緒に暮らしていたオペラ歌手アドリアーナ・フェラレーゼ（ケテワン・ケモクリーゼ）との仲が最悪になったのは当然だ。以降展開される、自分への愛がアンネッタに移ったと知ったフェラレーゼの嫉妬心に狂った行動とは？そして、女の嫉妬の板ばさみとなったダ・ポンテが考え出した窮余の一策とは？

これは現実？オペラ？劇中劇の傑作がまたここに！

『恋におちたシェイクスピア』（98年）は、タップリと使われた劇中劇がドラマの雰囲気盛りあげた。そこでは、若き日のシェイクスピアが、グウィネス・バルトロウ演じる男装した商人の娘と運命の恋に落ちる中、どれが現実？どれが劇？という何とも微妙な展開が面白かった。

他方、オペラ『ドン・ジョヴァンニ』では、ハイライトシーンに登場してくる巨大な石像を、ドン・ジョヴァンニは恐れることなく晚餐に招待する。しかして、これまでの罪を悔い改めるよう詰めよる石像に対してドン・ジョヴァンニはいかなる対応を？それはオペラの筋書きを知っている人なら誰でもわかることだが、本作のストーリー展開の焦点は、ダ・ポンテがこれまでの放蕩生活を捨ててアンネッタとの愛に生きることができるとかということになる。しかして、その後展開される物語は現実？それともオペラ？そんなスリル満載だから、劇中劇は面白い！ここにまた、劇中劇の傑作が誕生！

2010（平成22）年4月26日記